The Japanese Association for Behavior Analysis(JABA)

ワークショップ要旨

ワークショップ1　11月22日　9:00 - 10:30

B. F. スキナーの言語行動論を学ぶ: 徹底的行動主義の理解のために

佐藤方哉（慶應義塾大学）

ある人が「行動分析学を知っている」と言ったとしても、さまざまなレベルでの知り方がある。シェイピングやフェイディングといった技法的レベル、単一被験体法といった方法的レベル、三項随伴性といった概念的レベル、徹底的行動主義といった哲学的レベルが区別され、この順序でレベルが進むほど知り方が深くなる。オペラント技法などとよんで技法的レベルしか知らない行動療法家も多いが、これではその技法さえ本当に活かすことはできない。このワークショップは、徹底的行動主義にたつ行動的認識論の基礎ともいうべきスキナーの言語行動論を学ぶことにより、行動分析学の基礎を固めることを目的としている。1. 言語行動の定義、2. 言語行動の分類、3. 言語行動と意識、4. ルール支配行動、5. 「意味」の問題、の順で説明しながら、スキナーの言語行動論の特徴と、その徹底的行動主義との関連を浮き彫りにしたい。

ワークショップ2　11月22日　10:30 - 12:00

単一被験体法を学ぶ：行動科学における古くて新しい方法論

堀　耕治（埼玉医科大学）

単一被験体法とは行動分析の「プログラム」の根幹をなす方法論上の特徴のひとつであると同時に、さまざまな研究に適用可能性をもつ強力な「実験計画法」でもある。それは、1個体、またはごく少数の被験体（者）を用いて科学的に妥当な結論を導くための実験デザインの方法である。単一被験体法は、しかし決して行動分析に固有のものではなく、すくなくともその原型は、基礎医学をはじめ、生きものを扱う実証的研究に古くから用いられてきたものであり、いままた研究倫理・動物福祉の観点から、あらためてその価値が見直されつつある方法論である。このワークショップでは、研究例を挙げながら単一被験体法の原理から応用までを平易に解説する予定である。単一被験体法の原理に興味を持つ人、自身の研究で小規模標本を扱わざるを得ない人、グループデザインによる研究に限界を感じている人、そのほか行動研究における実験計画法に関心を持つ人々を対象とする。実験計画法・統計学に関する予備知識はとくに必要としない。

ワークショップ3　11月22日　19:00 - 20:30

自閉症児者援助の最先端：応用行動分析とTEACCHプログラム

梅永雄二（障害者職業総合センター）

TEACCHとはTreatment and Education of Autistic and related Communication handicapped CHildrenの略語で、ノースカロライナ大学医学部教授エリック・ショプラーらによって研究・開発された自閉症児者の包括的治療教育、援助プログラムである。TEACCHでは、環境の随伴性を一貫させることにより、幼児期から青年・成人、そして老年期の自閉症者までが、地域で自立した生活を送れるようになるための包括的プログラムを実施している。本ワークショップでは、TEACCHプログラムの基本的な考え方、技法、援助システムづくりの概説を行う。特に、UCLAを中心とした、ロバースらのプログラムとの考え方や技法の比較を行いながら話しを進める。また、「アセスメント」「コミュニケーション」「構造化」という3つの理論的な骨子についての解説も行う。親を共同治療者として親密な協力関係を維持しあうことなどのプログラムの具体的特徴にも言及する。

NII-Electronic Library Service